

琉球大学学術リポジトリ

大学における LGBT に対する（無意識の）バイアスとダイバーシティ

メタデータ	言語: ja 出版者: 国際地域創造学部国際言語文化プログラム 公開日: 2022-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金城, 克哉 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002017903

大学における LGBT に対する（無意識の）バイアスと ダイバーシティ

金城克哉

1. はじめに

本学の LGBT 施策についての現状と課題については金城 (2021) において論じた。その中でハラスメント相談支援センターが積極的に LGBT について啓発活動を行っていないと指摘したが、2021 年 9 月 22 日に筆者が所属する国際地域創造学部の教授会においてハラスメント相談支援センター長である矢野恵美教授によってハラスメント研修が行われた。その中で、LGBT についてセクシュアリティの在り方並びに性自認についての説明がなされた。大学内外を問わずこの SOGI (Sexual Orientation & Gender Identity) に関するハラスメントの問題は今後ますます重要になるものと考えられる。大学当局は教員ばかりではなく、職員及び学生にもさらなる LGBT 啓発活動を定期的を実施すべきであると筆者は考える。本稿では、大学の LGBT に関する啓発活動と同時に誰もが抱きやすい LGBT に関する（無意識の）バイアスについての教育・研修がダイバーシティ推進に不可欠であることを論じる。まず初めに読者自身のバイアスを確認するための LGBT 理解度チェックを用意した。本論に進む前に読者にはこの理解度チェックに回答願いたい。その後、バイアスとダイバーシティとの繋がり、Google 社におけるバイアスへの取り組み紹介、教員養成課程において LGBT に対する（無意識の）バイアスについて教育することの意義、最後にどのようにバイアスに対処するのかを論じる。なお、本稿では「LGBT」を LGBT に限らず他の性的マイノリティを含めた意味で用いる。

2. LGBT に関する理解度チェック

以下の理解度チェックの文言は薬師実芳他（著）『改訂新版 LGBT ってな

んだらう?』(p.25)から転載したものである(一部語句の改変あり。18は筆者が付け加えたもの)。読者は気軽に30秒程度で答えてもらいたい。解答と解説は本稿の最後に資料として添付したので、そちらを参照のこと。

タイトル:「LGBT」これってホント?

●次の1～18の説明が正しいか間違っているか○×で答えてください。

1. 同性愛は病気である。
2. 同性愛や性同一性障害は思春期に起こる一過性のもので、時間が経てば治る。
3. 親や教員がLGBTだと、子ども(生徒・学生)もLGBTになる。
4. LGBTは海外には多いが、日本にはいない。
5. LGBTと関わるとLGBTになる。
6. 同性愛者は同性の人ならどんな人でも好きになる。
7. LGBTであることがわかると就職できない。
8. 同性愛者は異性が怖いから同性を好きになる。
9. 全てのゲイはオネエ言葉で話す。
10. 全てのLGBTは物心ついた時からその自覚を持っている。
11. 同性愛を犯罪とみなす国はない。
12. LGBTには面白い人や美的センスが高い人が多い。
13. 全てのゲイは女っぽく、レズビアンは男っぽい。
14. 性同一性障害の人はみんな性別適合手術を希望している。
15. 全ての同性カップルに男役と女役がある。
16. HIV(エイズを引き起こすウイルス)はゲイだけが感染する。
17. LGBTは家族を持ってない。
18. 性別は男か女かのどちらかであり、「どちらでもない」や「どちらでもある」もしくは「自分の性別がわからない」などということはない。

3. バイアスと無意識のバイアス

バイアスは日常生活の様々な面に見られるものであり、我々は意識的にも無意識的にも無数のバイアスを持っている。(ロス 2021) 上記のチェック項目で不正解の箇所があった際には、それは読者がそういうバイアスを持っているという「気づき」が得られたと肯定的に捉えていただきたい。

辞書や研究者によって定義は様々であるが、ここで改めて辞書のバイアスの定義を見ておく(認知心理学の定義については藤田(2021)等を参照)：

bias: an opinion about a person, group or idea which makes you treat them unfairly or differently (LONGMAN Active Study Dictionary 2004)

bias: an inclination of temperament or outlook, especially : a personal and sometimes unreasoned judgment (Merriam-Webster Dictionary ウェブより)

ロングマン辞書ではバイアスとは「ある人物やグループ、もしくは考え方に対する意見で、自身がそれを元に対象とする人やグループを不公平に扱ったり異なったように扱ったりする」とする。一方のメリアム＝ウェブスターでは「(人の) 気質やものの見方の傾向、特に個人的で時に理性的でない(不合理な)判断」とされている。本稿ではバイアスを「偏見」と同等の意味で用いる。一方の無意識のバイアスには次のような定義がある(パク 2021)：

無意識＝自分が自分の行為に気づかないこと

偏見＝偏った見方・考え方。ある集団や個人に対して、十分な根拠なしにもつ偏った判断や意見等

実際のバイアスの例を見てみよう：

- (1) 血液型が A 型の人は几帳面だ。
- (2) A さんは沖縄出身だから英語ができる。
- (3) 女性がたくさん入っている理事会は時間がかかる。(森喜朗元総理)

他にも多くあるが、例えば「几帳面」という言葉は人によっては対象とする人物を褒める際にも用いられる。「沖縄出身だから英語ができる」というのは筆者自身が経験した（他者に言われた）ことである。3つ目の森元総理の発言は社会問題になったようにジェンダーバイアスに基づくものである。一見すると前者2つはポジティブな評価とも捉えられそうであるが、これは合理的根拠のない思い込みに過ぎない。これらのバイアス（例えば「Oという血液型の人は〜だ」）は、それを酒の席で話題にしたり、相手に話したりすることができる。すなわち意識的にそれを言語化して（他者に対して）表現することが可能である。

一方の「無意識のバイアス (unconscious bias)」とは自分でも意識していない、自分にそのようなバイアスがあるとは気付いていないバイアスを指す。人間の脳の情報処理には意識的なものと無意識的なものがあり、我々が知覚する情報の99%は無意識に処理されているという。この無意識の判断は処理速度が速く効率的ではあるが、十分な根拠に基づかない判断を下す恐れがある。無意識のバイアスの事例として以下の有名な実験がある。（パク 2021、ロス 2021）

1. 実験の背景：1970年代～80年代米国の音楽学校の卒業生の約40%以上が女性であったが、70年代における米国の5大オーケストラの女性比率は5%以下だった。
2. 実験：楽団員募集の際のオーディションで受験者と審査員の間にスクリーンを置き、受験者が審査員に見られないよう「ブラインド・オーディション」を採用した。
3. 結果：女性のオーディション合格率が上がった。

この実験により公正に審査をしていたはずの審査員には「男性の演奏が優れている」という無意識のバイアスがあったことが示された。このケースでは「性別」による無意識のバイアスが問題になったが、他にも「人種」、「移民」、「LGBT」などの属性でバイアスがあることが次第に明らかになり、実生活上マイノリティに不利な状況が生まれることがわかってきた。

4. ディスカッション

4-1. (無意識の) バイアスとダイバーシティ

人間の情報処理のほとんどが無意識になされており、人は誰もが何らかのバイアスを持っている。「私にはLGBTの友人がいるからLGBTに偏見はない」という人であっても、金城(2021)で指摘したように女性にバイアスがあり「レズ」という表現を「うっかり」用いる場合もある。筆者は「LGBTなんて気持ち悪い」というような個人の感情は他人からの働きかけによって変えることは困難だと考える。しかし、(無意識の)バイアスはものの見方や考え方であり、対象を理解しようとする試みと同時に自分自身がどのようなバイアスを持っているかに気づくこと、そして後述するように対象となる相手との接触などで低減できるものであると考える。

大学という場では教職員や学生が日々様々な活動をしている。教員は自身の研究活動だけでなく、講義の担当、学生の指導、入試をはじめとする各種委員会活動などの職務にあたる。優秀な教員は学部の長、〇〇センター長、副学長といった要職に就き、それに見合った給与の支給もなされる。機会があれば学長になれる可能性もある。一方、学部学生であれば、優秀な学生は表彰され、授業料免除、海外留学といった機会が得られる。それはその学生の秀でた点として評価され、就職活動や大学院進学にも大きな影響を与える。しかしながら、教職員の間にはLGBTに対する(無意識の)バイアスが存在するとしたらどうであろうか。その(無意識の)バイアスがLGBT学生の奨学金受給に影響を与えない、大学院進学のための推薦状に影響を与えないと言い切れるであろうか。その一方で教員の場合、LGBTをオープンにしている者が例えば学内の要職に就けないといったことがあってはならない。大学という組織・コミュニティの中でLGBT当事者が安心して仕事ができる環境、勉学・研究に励むことができる環境を整備しなければこの大学という組織に多大な影響を及ぼし、それは当事者に対する理不尽な扱いや差別へとつながる。(註1)

具体例を見てみよう。研究者がLGBT当事者であり、自らに最も切実で関心のあるテーマであるにもかかわらず、LGBT関連のテーマを選択することによってカミングアウトすることと同等の行為となるのではないか、「そういう

目で見られる」のではないかとの不安から LGBT に関するテーマで研究をすることができない、または論文を執筆できないということがある。また実際にクィア・スタディーズを専門とする研究者が、研究者のセクシュアリティと研究内容に関連があることから「単に自分のことだから気になるだけで、社会的な意義に乏しい研究」だと批判されたケースがあるという（隠岐：202-203）。大学の研究者というものは「社会的に意義のある」研究のみをしなければならないのであろうか。もし筆者の同僚がそのように考えているとしたらそれはバイアスであると指摘したい。ましてや人文社会学系の研究が理工系や医学の研究よりも劣っている、または（社会的）価値がないなどということはない。

パク（2021）は意識的なバイアスと無意識のバイアスが同じ結果をもたらすとして次のように指摘する：

ここで注目すべきは、無意識の偏見の存在は、人間が故意に操作した結果と同じ結果を無意識的に引き起こしてしまう、ということ。意識的に操作していないとはいえ、無意識にでも誤った判断をしていることは大きな問題です。これを放置すれば、知らぬままに他人、自分、特定の属性や対象を、不当に判断し、多くのチャンスを奪ってしまうことでしょう。だからこそ無意識の偏見（アンコンシャス・バイアス）があることを、強く自覚する必要があるのです。

これを踏まえて思考実験をしてみよう。本学に2名の男性の大学教員 A・B がおり、年齢・取得学位・業績が同じで、同等の社会貢献活動、同等の学生指導歴及び人物評価があったとする。A は既婚者で中学生と小学生の子供がおり、一方 B はゲイであることをオープンにし、パートナーはいるが現時点では日本で同性婚が認められていないため那覇市の同性パートナーシップ制度を利用しているものとしよう。本学には副学長という役職があるが、読者は A・B どちらの教員が副学長に任命される可能性が高いと考えるであろうか。日本ではまだまだ男性社会であると言われる。本学にはジェンダー推進室があり、女性教職員の活動を支えているが、それでも教職員の男女比は 50 : 50 ではな

い。そのような「男性社会」の中であって、男性ではあるが男性を性愛の対象とする B が「公正な目」で選ばれるであろうか。教職員の中に「男は結婚して子供を養うようになって一人前だ」というようなバイアスはないだろうか。結婚していない男性は「(どこか) 欠陥がある」というバイアスはないだろうか。そもそも婚姻関係にあること及び子を養っていることと大学における職務遂行能力とは関連性がない。何を持って一人前とするかも人によって基準が異なる。現時点で本学に LGBT に関する明確な差別禁止の指針はない。そのような中でバイアスによる不当な扱いがなされても当事者にはなす術がない。

金城 (2001) では本学が掲げるダイバーシティの理念に明記された女性、障がい者、高齢者、外国人に加えて LGBT という文言を付け加えるよう、そしてその理念に沿った組織づくり (対策室など) に取り組むことを提案した。我々は大学という大きな組織の中で活動している。その中には様々な属性を持った人がいる。LGBT はその属性の 1 つに過ぎないが、キャンパス内外に意識的・無意識的なバイアスがあるため、当事者は生きづらさを感じることなく職務を遂行したり学生生活を送ったりすることができない。本稿を読んでいる読者はこれまでに職場で次のような言葉を耳にしたことはないだろうか：

- (1) Y さんってコッチ系らしいよ！ (片手を頬にあてて)
- (2) レズビアンって～だよ。

バイアスとは十分な証拠もなく不合理な判断をすることである。本稿で言えば意識的にせよ無意識にせよ、LGBT (に限らず他のマイノリティ) に対してある種の決めつけ、思い込みを持っていることが問題となる。このバイアスはダイバーシティ (多様性) と両立するであろうか。多様な人がいることを認めあうことがダイバーシティではないのか。その個人の能力に目を向けず、その人の持つ LGBT という属性を問題視し何らかの決めつけをするというのは、その個人を個人として尊重していないことになるのではないのか。(水野 2020)

4-2. 大企業の無意識のバイアスへの取り組み

産学官連携と言いながら「学」(大学)の取り組みが(少なくともLGBTに関することについて)最も遅れていることは金城(2001)ですでに指摘したところである。沖縄県は2021年3月に都道府県のLGBT支援宣言としては初となる性の多様性を尊重する「沖縄県性の多様性尊重宣言(美ら島にじいる宣言)」を発した。一方、任意団体work with PrideはLGBTに関する取り組み指標を作り、その基準に照らしてブロンズ、シルバー、ゴールドとランク別に賞をもうけ、授賞式を行っている。2017年のゴールド賞の受賞企業にはオムロン株式会社、キリン株式会社、サントリーホールディングス株式会社、株式会社資生堂、ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループ、ソニー株式会社、株式会社ソニー・インタラクティブエンタテインメント、ソニーモバイルコミュニケーションズ株式会社、日産自動車株式会社、JT(日本たばこ産業株式会社)、パナソニック株式会社、富士通株式会社等の企業が名を連ねている。ここにあげた企業はLGBTも貴重な人材として扱い、またLGBTであっても他の社員に気を遣うことなく自分らしく働くことができるよう積極的な取り組みを行っている。

ここでGAFAの一角を担うGoogleの取り組みを紹介したい。Googleでは自社の社員に対し「無意識の偏見に意識を向ける」という偏見排除のプログラムを設け、社員にワークショップを受講させている。Googleのホームページから当該ワークショップの概要を引用する：

偏見をなくすための第一歩は偏見に対する知識を得ることです。ある研究によれば、無意識の偏見を自覚すると、偏見から脱することができるということがわかっています。また、人が態度を変えるためには、考え方の背後にある無意識の偏見を理解することが必要なケースがあるそうです。

2013年、Googleは、社員と経営陣を対象にUnconscious Bias @ Workといった研修や、それにまつわるツールを開発し、偏見を排除するための全社的な教育活動を始めたのです。この取り組みによって、Googleの

社員は、無意識の偏見についての共通認識を確立し、共通の言語で議論を行うための土台を作りました。(注：下線部分は本文では青文字で表記、リンクあり)

Google の人事部門では経営陣に対してこの無意識のバイアスを無くすことで企業にとってメリットがあるということを次のようにまとめている：

- ①無意識の偏見に焦点を当てることが重要である理由と、この問題を解決することが社員や採用応募者、ユーザーの利益を最大化することにつながる理由を説明する。たとえば、無意識の偏見がもたらす影響を減らすことができれば、多種多様な社員を雇用する機会が増え、その結果、これまで以上に革新的なソリューションを創出できるようになる可能性があります。
- ②無意識の偏見に関する科学的な理解を広め、全社員が十分な知識に基づいて話し合えるようにする。雇用から昇進、予算配分に至るまで、無意識の偏見がさまざまな場面に影響をもたらすことはすでに立証されています。そうした調査研究を紹介することも問題の解決に有効であり重要です。
- ③人々が抱く無意識の偏見を明らかにすることで、この問題が多方面に影響を及ぼすことを経営陣に理解してもらう。Implicit Association Test (IAT) というテストを通して、人種や体重、障がい、年齢、性的指向、性別など、多様なトピックにおける無意識の偏見を簡単に科学的に測定できます。

本稿を執筆しているのは2021年10月であるが、それよりも8年も前の2013年から Google は無意識のバイアスの影響を減らすことで多種多様な社員の雇用機会と革新的なソリューションの創出、雇用・昇進・予算配分への悪影響を減らすことを目的として社内研修を行なっている。

一方、大学は企業とは異なるが、様々な研究者が独自のテーマに沿って研

究を行なっている。創造的な活動という意味では自治体や企業よりも先んじているはずである。しかしながらそのコミュニティの中に無意識のバイアスが無数に存在し、個人（職員・学生・教員）の持つ本来の可能性を十分に引き出せずにいるとしたらどうであろうか。大学にとって致命的な損失となるのではないか。少子化が進み大学間の淘汰がすでに始まっている現在、本学は「島嶼地域の特色」という使い古された謳い文句だけで学生を惹きつけることが果たして可能なのか。本学の教職員並びに学生が全体として無意識のバイアスの教育・研修に積極的に取り組み、ダイバーシティを有名無実のものではなく様々な人々を魅了するような特色として生かしていくべきではないだろうか。

4-3. 教員志望学生に対する教育

本学には教育学部があり、また各学部でも教員免許取得の要件が定められており、例えば理学部数理科学科では教員志望の学生が多数いるという（琉球大学理学部数理科学科 HP より）。では、仮にこの数学教員志望の学生 A が教員になるために必要な科目を受講、単位を取得、教育実習も終了し採用試験に合格して晴れて中学校、もしくは高校の教員になったとしよう。この学生 A の学びを振り返って、本学で学んだことの中に LGBT に関することはあるであろうか。数学の教員が生徒指導に携わらないということはないであろう。学級担任になれば生徒の相談にももの、自分の学級でいじめの問題があれば対応を迫られる。もちろんこのように実社会に出た後のことまで大学の講義で全てカバーできるわけではない。しかしながら、国語・英語・数学・理科・社会・体育など様々な教員が学校というコミュニティの中で日々生徒たちと触れ合う中で、本学出身の教員が LGBT に関する知識がないため対応できないという態度で済まされるであろうか。

拙稿（2021）でも触れたが、琉球大学のダイバーシティ推進宣言の中では、「創造と寛容あふれる地域・グローバル社会を創出するランドグラント大学としての役割を果たす必要がある」と述べられている。我々大学の教員自体に LGBT に対する（無意識の）バイアスがあり、それを意識しないまま教育をし、学生を社会に送り出しているとしたら問題ではないのか。少なくとも、

教員志望の学生には、きちんと自らの中の（無意識の）バイアスと向き合うよう大学として取り組むべきである。

読者は「同性愛嫌悪（ホモフォビア）」という言葉をご存知だろうか。-phobia は「嫌悪」や「恐怖症」と訳される。「高所恐怖症」や「閉所恐怖症」という言葉は読者もご存知だろう。この「同性愛嫌悪」は日本ではそう表立って問題になることはないが、海外では同性愛嫌悪によって路上でいきなり同性愛カップルが暴行を受けるという被害が後を絶たない。この「同性愛嫌悪」の感情が教員志望の学生自身でも意識しない、無意識のバイアスとなっていたらどうであろうか。

自身が勤務する学校内に LGBT の生徒がいたときに、教師となった本学出身者はどのような態度を取るであろう。バイアスがかかった状態で人に接すると次のような行動に表れるとされる（パク 2021）：

- 視線を合わせない ●言葉数が少なくなる ●表情が乏しくなる
- 距離を置く ●無視をする ●軽くあしらう ●見下すような態度を取る

LGBT であることはその生徒の数多くある個性の中の 1 つに過ぎない。しかしながら同性愛嫌悪（これは同性愛だけでなく LGBT に対する嫌悪感についても使われる）を意識的にせよ無意識にせよ、その教員が持っていて上記のような態度で LGBT の生徒に接するとき、生徒はどのような気持ちになるであろうか。

ここで日高 (2018) の LGBT といじめに関する調査結果を紹介する：

筆者が 2016 年に全国の LGBT を対象に実施したインターネット調査（有効回答数国内在住の 1 万 5,064 人）ではいじめ被害経験者は全体で 58.2%（10 代 49.4%、20 代 55.8%、30 代 60.9%、40 代 63.1%、50 歳以上 49.8%）であり、いじめ被害経験がある者の 63.8% はホモ・おかま・おとこおんな等の言葉によるいじめ被害があり、18.3% は服を脱がされるいじめに遭っていた。いじめ被害経験者のうち、いじめの解決のため

に先生が役に立ってくれたと認識している者は全体でわずか13.6% 足らずであり、教員にとっては厳しい現状が突きつけられていると言わざるを得ない。(同上 p.6)

さらに、日高が2017年に三重県立高校(全日制)の2年生を対象とした調査では、「いざというときに力になってくれる友人や先生がいると回答したLGBT当事者の生徒が46.8%であったのに対し、非当事者は67.1%、「学校には自分にとって安心できる場所がある」と回答したLGBT当事者の生徒は36.9%であったのに対し非当事者は56.6%であったと言う(同上 pp.8-11)。LGBTの生徒が先生は頼りにならない、学校は安心できる場所ではないと考えているという現実を、教員志望の大学生はもちろん、我々教員養成にあたる大学教員も深刻に受け止めなければならない。

5. おわりに：(無意識の)バイアスとどう向き合うか

我々は誰でもバイアスを持っており、それから逃れるのはかなり難しいとされる。パク(2021)は無意識のバイアスに対するためには以下のことが必要だとする：

- (1) 自分が偏見を持っていると認める
- (2) 「思い込み」を疑う
- (3) 根拠をもって判断する
- (4) 言葉遣いに気をつける
- (5) 受容する行動をとる

また、守屋(2021)は無意識のバイアスへの対応に次の3つの点を挙げる(『共同参画』より)：

- (1) 決めつけない・押し付けない
- (2) 相手の表情や態度の変化など「サイン」に注目する

(3) 自己認知

上記2人の意見には重なるところがある。筆者が特に重要だと考えるのは我々が持っている「決めつけ・思い込み」である。自分のこれまでの人生経験のみに基づく判断や客観的事実を無視した「～でなければならない」という「決めつけ」は他の可能性を排除し、多様な物の見方を阻害する（例：性は男性か女性かのどちらかに決まっている、男が男を好きになるはずがない、男は男らしく・女は女らしくあるべきだ等）。この「決めつけ・思い込み」に沿わないLGBTは自分の視界から排除すべき対象だと認識され、相手を無視したり蔑視した行動をとったりすることにつながる。無意識のバイアスを低減させるには自らの中の「決めつけ」と「思い込み」を見直すことが重要である。

一方、意識的に「LGBTは病気だ」・「生産性のない同性愛者に同性婚という特権を与えるな」という偏見を持っている場合に対処する方法はあるであろうか。横田(2012)はロニー・アバーゲル氏の次の言葉を引用している：

自分と離れたところにいる人たちにはいともたやすく偏見を持ってしまふことがあるが、個人的な接触のある人たちについて偏見をもち続けることは少ない。「私は移民は嫌いだけど、私の学校のモハンマドはいい子だよ、だって私は彼を知ってるもん」と言った類の話を私たちはしばしば耳にする。

ロニー・アバーゲル氏はヒューマンライブラリー創設者の1人である。ヒューマンライブラリーとは：

障がいをもっていたり、人種的なマイノリティであったりすることで人々から近づきにくいと思われたり、偏見を受けやすい立場にある人が、「本」となって30～45分程度貸し出され、読者は1対1で、あるいは1対数人でその「本」の語りに耳を傾け、対話がなされるという特別な「図書館」（イベント）である。（横田2012：155）

偏見を持たれやすい人物から直接話を聞く。それも講義でゲストとして招かれるという形式ではなく、1対1または1対数人という形式であるところが大変ユニークである。もし本学でもこのような取り組みができるのであれば、LGBTに対する偏見を低減させるのに役立つのではないか。アバーゲル氏の「個人的な接触のある人たちについて偏見をもち続けることは少ない」という指摘を生かす努力が必要である。(ロス 2021 : 236-238 も参照のこと)

無知は偏見を生み出し、偏見は差別へとつながる。自分の中の無意識の偏見に気づくことは自分の中の「無知」を「知」に変える作業に他ならない。意識化できる偏見があれば、それはどこから来るものなのか自分に問うてみる。そこにも「知」が生まれる。まず私たちはLGBTについて知ろうとする、知識を得る、自分の中にある思い込みに気づく。そこから自らを変える学びを得なければ、ダイバーシティは中身のないただの理念で終わるのであろう。本学が10年後、20年後にLGBT、例えば外国人MtF（トランス女性）でレズビアンをオープンにしパートナーの女性と結婚している学長が誕生し、教職員や学生がLGBTであることのみならず他のマイノリティであっても生きづらさを感じない大学になってもらいたいと切に願っている。(註2)

註

1. 日本学生支援機構が、給付型奨学金の支給対象者に対し、将来の結婚の意思や希望する子どもの数などを聞くアンケートを回答者が特定できる形で実施し、ハラスメントの可能性を指摘された。機構は「給付型奨学金は少子化対策として行われている」としているが、ゲイの学生からは「少子化対策のために給付型奨学金を行ってるなら、国のために結婚して子どもを産んでくれてことだよね…。結婚する気ない方、LGBTQや不妊症の方は給付型奨学生には相応しくないってこと?」という声があがっている(毎日新聞電子版 2021年10月7日、下線部は引用者による)
2. MtF (Male to Female) のトランス女性の心の性は女性である。しかし、だからといって好きになる対象が男性であるとは限らない。トランス女性にも「レズビアン」はいる。MtF のトランス女性だから男性が好きなのだろう

うという思い込みを持っていたとしたら、それは読者の無意識のバイアスである。

参考文献

隠岐さや香 2017「日本の大学での性的少数者に関する調査結果」 三成美保
(編)『教育と LGBTI を繋ぐ：学校・大学の現場から考える』 青弓社、
pp.195-209.

金城克哉 2021「琉球大学における LGBT 施策の現状と課題」『言語文化研究紀
要 SCRIPSIMUS』 No.29, pp.1-21.

Google re:Work「偏見の排除」

<https://rework.withgoogle.com/jp/subjects/unbiasing/>

内閣府男女共同参画局総務課 2021「アンコンシャス・バイアスへの気づきは、
ひとりひとりがイキイキと活躍する社会への第一歩」『共同参画』 pp.2-3
パク・スックチャ 2021『アンコンシャス・バイアス—無意識の偏見—とは何
か』 ICE 出版

BBC NEWS JAPAN (2019年8月30日)

『ゲイ遺伝子』は存在しない、米ハーヴァード大などの研究で明らかに」

<https://www.bbc.com/japanese/49520044>

日高庸晴 2018 「LGBTs 支援の最前線に立つ教員に求められる役割」『子ども
と健康』 No.107, pp.4-13.

藤田政博 2021『バイアスとは何か』ちくま新書

古田大輔 (編) 2021『子どもを育てられるなんて思わなかった』山川出版社

毎日新聞電子版 「結婚は？子ども何人？ 奨学金支給学生にアンケート 批判
受け中止」(2021.10.7)

<https://mainichi.jp/articles/20211007/k00/00m/040/012000c?fm=line>

水野雄峰 2020『ダイバーシティと無意識の偏見』GC Lab 出版

西村宏堂 2020『正々堂々：私が好きな私で生きていいんだ』サンマーク出版

薬師実芳他 (著) 2019『改訂新版 LGBT ってなんだろう？』合同出版

横田雅弘 2012「ヒューマンライブラリーとは何か：その背景と開催への誘い」

加賀美常美代他（編著）『多文化社会の偏見・差別』明石書店、pp.150-171.

Label X（編著）2016『X ジェンダーって何？：日本における多様な性のあり方』緑風出版

ハワード・J・ロス（著）御船由美子（訳）2021『なぜあなたは自分の偏見に気づけないのか』原書房

資料：理解度チェックの解答と解説

1. 同性愛は如何なる意味でも病気（疾病）ではない。「頭がおかしい」という言い方で精神の異常を疑う人がいるが、WHOは1990年5月17日に同性愛を「病気」のリストから除外している。日本精神神経学会も同性愛は精神疾患ではないとしている。
2. 同性愛感情や性自認について、早い子どもでは小学校入学以前から同性が好きだ、自分の体の性と心の性に違和感を感じるという子どももいる。これは一過性のものではなく、幼少期から思春期、青年期を通じて一貫して変化しない。両性愛では男性・女性に同時期に性愛の対象となることはなく、異性が好きな時期・同性が好きな時期があるとされる。「時間が経てば治る」という大人の安易な発言は子どもを傷つける。幼い頃からずっと周囲とは違う感情を抱いていることを誰にも相談できずに悩み続けている子どもには「今は正常ではない状態である」という含意を持つ。
3. 子どもは親や教師の影響を受けて LGBT になるのではない。遺伝子研究でも「同性愛遺伝子」などは見つかっていない。(BBC NEWS JAPAN (2019)) 親の育て方が悪かったから LGBT になるのでもない。同性が好き、両性が好き、体と心の性の不一致があるというのは親の遺伝子も養育方法も全く関係ない。ましてや教師の影響で生徒が LGBT になることはない。
4. LGBT は世界中にいる。海外だけに限られた話ではない。日本でも北は北海道から南は沖縄まで全国各地にいる。また東京・名古屋・大阪・博多といった大都市圏に限らず、地方都市にも LGBT はいる。

5. LGBTにかかわっても LGBTになることはない。レズビアンと友人関係になった女性がレズビアンになることはない。ゲイと友人になった男性もゲイになることはない。他人の影響を受けて自身の性的指向が変化することはない。他人の影響で自身の性自認（自分の心の性）が変化することもない。LGBTは病気ではなく、それが他人に「感染する」こともない。
6. 同性愛者は同性を性愛の対象とするが、同性であればどんな人でもいいというわけではない。異性愛の男性は女性であれば年齢・容姿・体型を問わず性的な関係を持ちたいと願うのであろうか。異性愛女性は男性であれば年齢・容姿・体型・収入を問わず恋をし、結婚したいと望むのであろうか。このような特にゲイに対するバイアスの強さには根強いものがある。異性愛男性が、例えば同僚の中にゲイがいると知った時に「襲われたらどうしよう」と不安がる場合があると聞く。100人のゲイがいれば、その好みは100通りある。自分がゲイに襲われる心配をする男性は、それ以前に、自分の容姿がそもそも男女を問わず人に好かれるものであるかどうか考えた方がいい。
7. 必ずしも就職できないとは限らない。トランスジェンダーであることを就活で明らかにしていても就職できる場合もあるし、できない場合もある。最近ではLGBTフレンドリーな大手企業が増え（本文中の大手企業等）、LGBTだから就職を断られるというケースは少なくなってきている。
8. 同性愛者は異性が怖いから同性が好きになるのではない。同性を性愛の対象にしているだけのことであって、そこに異性という全く興味のない対象のことを考える余地はない。レズビアンは男性が嫌いだから（男性恐怖症だから）女性を好きになるのではない。世界には男性恐怖症のレズビアンが存在している可能性はあるが、その女性が女性を性愛の対象とすると男性恐怖症とは別の次元の話である。
9. ゲイはみんなオネエ言葉を使っているわけではない。オネエ言葉というのは「～なのよ」「～かしら?」「～だわ」といった従来女性が用いるとされてきた言葉遣いを指すものである。このバイアスも大変強いものがあり、「ゲイ＝オネエ」という図式が頭の中に出来上がってしまうと、オネエ言

葉を使わない男性的なゲイ、異性愛男性のようなゲイが目前にいてもそれが目に入らない。(これは「確証バイアス」と呼ばれる)「ゲイは女性っぽい」というバイアス形成要因の一部にはこの「オネエ言葉」の存在がある。現実には女性っぽくないゲイも多く存在する。

10. バイアスによく「X(という属性を持っている人)はみんなYだ」という形で現れる。もちろん無意識のバイアスもそうである。物心ついた時から同性が好きだった、心の性と体の性に違和感を持っていたという人たちもいるが、全てのLGBTがそうなのではない。LGBTの中には無性愛(アセクシュアル)も含まれる。アセクシュアルの人は幼少期よりは思春期になって友人たちのどのアイドルに興味があるのかなど話題に違和感を感じるところから自分っておかしいのかなと感じることがある。また周囲からの勧めで結婚をして子どもをもうけたが、何かが違うと感じ始め、自分の中の同性に惹かれる感情に改めて気づき、離婚するというケースもある。
11. 特にイスラム教を信仰している人々が大半を占める国々では同性愛は犯罪と見なされ、逮捕されたり罰せられたりする。特に中東のサウジアラビア、イラク、イランなどでは死刑になる。東南アジアで最大のイスラム国であるインドネシアでは2021年1月、同性愛の男性カップルに鞭打ちの刑が科されたと報道されている。一方、台湾ではLGBTに寛容であり、アジアで初めて同性婚が認められた(2020年)。アメリカ合衆国はLGBTに寛容な国であると思われがちであるが、全ての州で同性間の性交渉が合法となったのは2003年である。それまでは州によって合法・違法が分かれていた。
12. メディアに登場するLGBTの中には頭の回転が早く的確なコメントや冗談を言って視聴者を魅了する人もいるが、LGBTの人々全てが同じような特徴を持っているとは限らない。たまたまテレビに登場したLGBTを見て、「ゲイってみんな～なんだ」、「レズビアンってやっぱり～なんだね」などと決めつけてしまうのは危険である。(「早まった一般化」の例)
13. これはよく耳にする、そして世間一般に広まっていると思われるバイアスである。100人のゲイがいれば、100通りの個性がある。この100人を一

括りにして「女っぼい」と決めつけることはできない。逆に 100 人のレズビアンも全員が「男っぼい」わけではない。これは「個」を無視してゲイやレズビアンという集団にレッテル貼りをしているにすぎない。

14. 生まれた時に指定され戸籍に登録された性と心の性が違う人を広義のトランスジェンダーと言う。この心の性と体の性に違和感を覚える人は「性別違和」の問題に悩んでいる。しかしながら、トランスジェンダーであっても、性別適合手術を望んでいる人もいれば、そうでない人もいる。FtM (Female to Male, トランス男性) の場合、胸の膨らみに嫌悪感を持つため、それを抑えるための特殊な下着も開発されている。その下着を着ることで性別違和の感覚がやわらぎ、性別適合手術はしなくてもよいと考える人もいる。逆に性別適合手術を是非行い、戸籍も変えたいと望む人もいる。これも上記と同様、100 人のトランスジェンダー女性と 100 人のトランスジェンダー男性がいれば、合わせて 200 通りの考え方があることになる。全員が手術を望んでいるわけではなく、(多少の不便さはあっても) 心の性で暮らしていくことができるならそれでもいいと考える人もいる。
15. 男役と女役とは何か。女役は家にいて家事をし、男役は家庭の維持のために労働するということだろうか。このような女性・男性の役割の押し付けはジェンダー・バイアスである。このようなジェンダー・バイアスが女性の社会進出を阻んでいることは周知の通りである。その一方で、性交渉の際に男役・女役があると一般に考えられているようである。ゲイの場合、肛門性交で挿入する側が男役、挿入される側が女役だと考えられがちであるが、実はそうではない。性交渉には様々な形態があるのであって、どちらが相手をリードするかという観点からすれば、1 回の性交渉であってもリードする側が入れ替わる場合もあるし、そもそも挿入自体をしないような場合、男役・女役という概念自体が無意味になる。さらに、レズビアン同士の性交渉では必ずしも挿入自体が必須ではない。
16. HIV (ヒト免疫不全ウイルス) に感染するケースは男性同士の性交渉が最も多いことがわかっているが、異性愛男性でも、異性愛女性でも、レズビアンでも、トランスジェンダーでも、HIV に感染する可能性はある。HIV

感染は、感染者の体液と相手の粘膜が接触するような環境で起こることがわかっている。男女間の性交渉であっても感染は起こる。

17. 古田（編）『子どもを育てられるなんて思わなかった』ではLGBTの家族のありようが描かれている。トランスジェンダーでも同性カップルでも子育てしている人たちはいる。LGBTだから家族を持っていないということはない。また「子どもがいて初めて家族と呼べるのだ」と考えるのもバイアスである。
18. 僧侶の西村宏堂氏は著書『正々堂々：私が好きな私で生きていいんだ』の中で、「私は、男でも女でもないし、男でも女でもあるの」と述べている。2021年6月末には歌手の宇多田ヒカルさんが「私はノンバイナリー」とInstagramの生配信で告白している。通常、ノンバイナリーというのは、AかBか（例えば「男か女か」、「黒か白か」、「陽か陰」か）という二項対立という立場から離れた、AでもBでもない（yかもしれない）、もしくはAでもBでもあるという考え方、立場を指す。また、世界的な用法ではないが、日本国内では「Xジェンダー」という呼び方がある。「男女どちらか片方のみに属した性自認を持たない人」や「男性・女性、両方の性自認を持つ人」などを指す。これらの人々にとって、「男性か女性か」の二択を迫られることは苦痛でしかない。（Label X 2016）

上述の18の記述に○で答えた読者はその部分にLGBTに関してバイアス（偏見）があると考えられる。正答は全て×である。

**(Un) conscious bias and diversity :
How they affect LGBT students and faculty staff on campus**

Katsuya KINJO

This paper argues that (un) conscious bias against LGBT affect the students and faculty staff on campus. Bias itself is a necessary system innate in human cognition; however, when it comes to bias against a certain group of people, e.g., LGBT, we tend to make mistakes. A list of 18 statements is provided to check the reader's own bias against LGBT. On basis of their own answer, the readers are recommended to proceed reading the rest of this paper, in which introduces Google's bias-reducing training program. Moreover, this paper highlights the fact that we educate the undergraduate students who wish to be teachers in middle/high school, but this university (and perhaps other universities, too) does not have any training courses dealing with LGBT and (un) conscious bias. The final chapter discusses how to face our (un) conscious bias.